

1. マヤと王様

かつて、ルソン王国に、王様の宮殿で働く貧しい庭師が住んでいました。このきびしい仕事を誠実にやる庭師には、マヤという名の美しい娘がいました。彼女は大変美しいだけでなく、大変賢く、利口でもあったのです。

マヤの賢明さの噂は、すぐにその土地全体に広がってゆきました。女の子に美しさと賢さが備わっているのは大変めずらしかったのです。

ついに、マヤの名声は、宮殿の王様の所まで届き、王様は、この美しい少女が、みんなが言うように本当に聡明であるのかどうか、知りたいと興味を持ったのです。王様はそこで、マヤをテストすることにしました。

王様は美しいマヤの知性をテストする賢い方法を思いつき、マヤの家に使者を遣わしました。その使者は、一緒に金ぴかの籠に入った小さな鳥を持ってゆきました。

マヤの父親は使者を向かえ、すぐに彼が家に入るのを許可しました。

「国王陛下は、あなたの娘に、彼の謎を解いてもらいたい、ということだ。」と使者は言いました。「どうぞ、彼女を私のところへ連れてきてください。」

使者が小さな家の台所で待っている間に、マヤの父親は意気込んで、娘の寝室へ行きました。そこでは、マヤは針と糸で絹のテーブルクロスに刺繍縫いをしているところでした。彼女の父はマヤに、使者が王の謎を彼女に解いてもらいたいと思っていることを告げました。

マヤの父は、彼の美しい娘について王様が関心を持った、ということで、大変意気込んでいましたが、しかし、マヤは大変静かに留まり、そして、父の後について台所へ入ってきましたが、なおも彼女が刺繍をしていた絹の布を持ったままでした。

マヤは王様の使者に感謝を述べて、彼に問いました。「私は国王陛下に何をしてさしあげたいのでしょうか。」

その使者は金ぴかの籠の小さな鳥を持ち上げて、答えました。「王様はあなたに、この鳥から、1

0種類の料理を作ってもらいたいのです。」

マヤはその鳥を見ました。それは彼女の小さな手ほども大きくないのです。彼女は王様が全く不可能な要求をしていることを知りました。彼女はしばらく考えました。そして、テーブルクロスの刺繍をしている小さな針を取り出して、それを使者に手渡し、言いました。「どうぞ、国王陛下に申し上げてください。もし、私のこの銀の針で、10枚の皿を作ってくださいなら、私はこの鳥から10種類の料理が作れます。」

その使者は丁寧にお礼を述べ、マヤの銀の針を取り、家を出ました。マヤは父の方を振り向き、うまくいったでしょ、という表情で笑いました。

使者が宮殿に帰ると、マヤの答えを王に告げました。王様は笑いました。「それは大変賢い答えだ。」と言いました。「おそらく、彼らが言うように、彼女は賢いのだろう。」

しかし、興味を持った王様の好奇心は止まりませんでした。そして、彼女の利口さを試す、また別の謎を考えました。

次の日、使者はまたマヤとその父の家に遣わされました。今度は、彼は一匹の羊を連れていました。

また、マヤの父は使者が家に入るのを許可し、マヤが呼ばれました。マヤは、使者が大きな羊を連れてきていることに驚きました。

「私は王様に何をして差し上げたいのでしょうか？」とマヤは使者に質問しました。

使者は羊を指差してマヤに言いました。「王様はあなたにこの羊を売ってもらいたい。あなたは羊を売ったお金だけでなく、羊も丸ごと返さなければならぬ。」

マヤの父は、今回はもう王様がすでに彼の娘を負かし、どうにも彼女にはこの難しい問題を解決することはできないと思いました。

しかしマヤはまだ、王様に負かされるとは、思っていないませんでした。彼女は裁縫箱から、大きな一組のはさみを持ってきて、びっくりしている父と、言葉を失っている使者の前で、羊の後ろから羊毛を丸ごと刈り進みました。

羊が完全に羊毛を刈り取られると、マヤはすぐに父を近くの外套作りの家に行かせました。

フィリピンの神話と伝説

外套作りは到着すると、その羊毛を調べ、少なくとも2着の立派な外套ができるので、ふさわしい値段のお金をマヤに渡しました。マヤはそのお金を使者に渡し、それと裸の羊を王様に返すように伝えました。

使者は宮殿に帰ると、羊毛のお金と毛を刈られた羊を王様に渡しました。王様は大変感心しました。「このマヤは本当に大変賢い少女だ。」と彼は笑いました。

しかし、まだ王様はもう一度マヤの賢さを試したく思いました。次の日、王様はまた使者をマヤと父親の家に、もう一つの解けない謎を持って行かせました。

同時に、王様は宮殿の隣にある湖を3日間閉鎖する宣言を發布しました。王様が、水泳や水浴びのような個人的なことのために使うためです。このようなことはしばしば、1年に数回ありました。

使者はマヤと父親の家に着きました。

「王様に何をして差し上げましょうか？」とマヤが尋ねました。

「王様は大変な病気である。」と使者は言いました。そして、彼の病気を癒すには、グラスに一杯の竜の乳がいる。もし、明日までにお前が竜の乳を手に入れないと、お前の父親は宮殿の仕事から解雇されるだろう。」

使者は二人におじぎをして、家から出てゆきました。

マヤの父は悲しい顔をして娘の方を振り返りました。「今回は」と父は言いました。「王様はおまえに不可能な仕事を要求してきた。」

しかし、マヤは笑って、そして父に言いました。「心配しないで、お父さん。宮殿でのお父さんの仕事は大丈夫よ。」彼女には計画がありました。彼女と父は、庭から山羊を取ってきて、それを殺し、その生々しい血を、敷物と毛布と枕に塗りつけました。

次の朝、王様は宮殿の隣の湖で、水浴びと水泳をしていました。マヤは、血まみれの敷物、毛布とベッドの枕を抱えて、湖に着きました。彼女はこの湖が好きでした。彼女は長い間静かに座って、ここにたくさん生えているスイレンをじっと見っていました。彼女は王様が水浴びをしている近くにある、湖の端の岩の上に座って、彼には気付か

ないふりをしていました。

マヤが石鹸を用意しているの、王様は好奇心と少し怒りをいだいて彼女の方に泳いできました。「お嬢さん、ここで何をしているんだ。」彼は怒鳴りました。「お前はこの湖が閉鎖されていることを知らないのか。そして、私がお前の王様であることも知らないのか。」

マヤは微笑んで、丁寧に王に向かって頭を下げました。「すみません、王様。しかし、どうやってあなたが私の王様であることを気付けるでしょうか。あなたは何も着ておられないし、王冠もありません。」

これは、もっと王様を憤慨させました。「お前のおうへいな態度のために、私はお前を牢屋に入れなければならない。すぐにこの湖から出なさい。」

しかし、マヤは動じませんでした。「どうぞお赦してください、王様。しかし、私はこれらのものをすぐに洗わなければなりません。」

王様は、マヤが血まみれの敷物、血まみれの毛布、そして血まみれのベッドの枕を持ち上げているのに驚きました。「どのようにして、こんなたくさんの血がそれらに付いたのか？」と尋ねました。

マヤは笑って言いました。「昨夜、私の父が男の子を産みました。私たちの村では、新しく生まれた子どもの血がついたものは、全部この湖で洗うことになっています。これは、何百年にもさかのぼる伝統です。」

マヤには見えませんでした。王様の若く素晴らしい息子が、湖の反対側の茂みからその様子を見ていました。彼は、父である王様にあえて挑戦しているこの少女の勇気ある精神に、すぐに感動してしまいました。

王様はもう本当にマヤに怒りを持ってきました。「お前は私をバカにしているのか？」彼は静かな少女に怒鳴りました。「男が子どもを産むなんて不可能だ。それは、私が今まで聞いた中で一番バカげた話だ。」

マヤは王様に微笑みました。「しかし、竜の乳を試すほどバカげてはいないでしょう。」

そこで、王様はその美しく若い少女が有名なマヤであることがわかりました。王様は、笑って、彼を負かしたその少女を賞賛しました。彼は大声をあげて、心から笑いました。「素晴らしい少女よ。」

フィリピンの神話と伝説

お前はまた私を負かした。お前はみんなが言うように本当に賢い。私はお前とお前の父を今夜の宮殿の夕食に招待したい。私はお前の家に迎えの車を送る。」

マヤは立ち上がり、王様に礼を言い、おじぎして顔に満足した笑みをうかべて、湖から出て行きました。

湖の反対側の茂みの中から、王様の素晴らしい息子は、この少女の持っている、美しさ、勇気、才覚、そして知恵に、溢れる賞賛を送りました。

その夜、王様が約束したように、王室の車がマヤと父の家に着き、彼らを王宮に連れてゆきました。

夕食は大成功でした。王様はマヤに感心し、父親を昇格させ、給料を倍にしました。

しかし、おそらくもっと重要なことは、王様が、彼の息子が魅力的なマヤに恋に落ちていることを知ったことです。王様は手を叩き、宮廷音楽家たちを呼んで、甘い愛の歌を演奏させました。音楽が始まるやいなや、王様の息子は夕食のテーブルから立ち上がり、美しいマヤに、踊っていいかたずねました。マヤはそのような素晴らしい若い男性の申し出を断ることはできませんでした。

そして、マヤと王様の息子は、その夜、一緒に踊り、お互いしっかりと腕を組み、彼らの父たちは、夕食の食卓から、その幸せな光景を見ていました。

音楽家たちの演奏が終わるまでに、王様の息子はマヤに結婚を申し込みました。王様とマヤの父は、結婚の申し込みを祝福し、赤ワインで乾杯して、夕食を閉じました。

そして、マヤと王様の息子はすぐに結婚し、全地方で幸せな出来事のご馳走と休日が、王様によって用意されました。

マヤと彼女の夫はその後幸せに暮らし、その時から、彼女は王様の個人的な相談役になり、必要に応じて、いつも彼の隣りにいました。